

# 2173再構築 26

話し合いが問われる  
時

エリー

<調べた言葉>

議論

話し合い

相談

交渉

保守

革新

穏健

<本文>

あるところに、にわとりを飼っている小さな村があって、そこでは醤油も作っていた。卵に醤油で味付けすると美味しいと気づいてから、みんながそうするようになった。「目玉焼きには醤油」という習慣が根付いた。

他にある調味料は、塩と砂糖と酒と酢と油だった。

ある日、村人の一人が、もっと美味しい目玉焼きの食べ方はないかと考えて、卵黄と塩と酢と油を使って、マヨネーズというものを発明した。

好きという人もいれば、嫌いという人もいた。

貴重な卵を使ってソースを作るなんて贅沢、という批判も出た。

結論はまとまらず、村としての方針はなく、各家が判断することになった。

よその家でマヨネーズというものを味わった子どもが、親に家でも作ろうと訴えたとしても、「うちは醤油に決まっている」ときっぱり拒まれた。

それは貧しかったからかもしれないし、変化を嫌ったかもしれない。

子どもには理由は分からなかったが、食べれない辛さだけは身に染みた。

ある家では、親が新しいものが好きで、不気味がる子どもに無理矢理食べさせて面白がったかもしれない。

産まれる卵の数が決まっている以上、毎日マヨネーズを作ることは難しい。

多くの家では、いつもは醤油で、誰かが誕生日の時にはマヨネーズも用意しましょう、に話が落ち着いた。

ところが、ある秋祭りの時に、村のみんなで用意して、みんなで食べることになった。卵には醤油でよい保守派と、マヨネーズも用意しようという革新派が対立した。

醤油をかけるなら、たまごは30個で用意すればよい。

マヨネーズを作るなら、たまごは45個必要になる。

余分に必要な15個をどうするのか？

マヨネーズを食べたい人だけが追加分を払えばよい、と保守派が主張すれば、みんなのお祭りだからみんなで負担すべき、と改革派。

保守派にとって、「醤油以外を認める」と「卵の負担が増える」という二重の意味で、妥協が求められている。

要求を突き付けている革新派にとって、我慢すべきことはない。「醤油しか許されない状態が我慢」といえば我慢。

保守派の家では許されなかったマヨネーズが、お祭りの時だけは味わうことができるなら、保守派の家のマヨネーズ希望の子どもにとって、やっとめぐってきたチャンスだ。

そう考えると、「他の家の子どもであっても、マヨネーズが欲しいなら、マヨネーズを食べる機会を与えるべき」と捉えなおすことができるので、「みんなのお祭りだから、みんなで負担する」という主張に、わがままを通す以外の意味が出てくる。

「機会の平等」という意義が出てくる。

保守と革新、どちらの主張にも一理あるから、どっちが勝ってもおかしくない。

結局は、どっちを望む人が多いか（多数決）や、影響力を持つ人がどう考えるか（支配者）次第で決まるだろう。

誰か一人が絶対的な支配力を持っていて、「醤油のみ」を支持すればマヨネーズは許されないし、「マヨネーズもよし」となれば両方用意することになる。

この場合、決定に逆らうことは、支配者に逆らうことだから、大きな決心がいる。マヨネーズを使うか、使わないかだけの問題ではなくなる。より大きな問題の陰に隠れて、マヨネーズは些細なことであり、命をかけて主張すべき問題ではなくなってしまう。

どちらになるにしても、同じ人が支配者である間は、その人の判断が「伝統」として根付くことになる。

絶対的な支配者がいなくて、多数決で決まった場合、次の投票で結果が変わるかもしれないなら、「受け入れる」をするより「今回は負けたが間違っていない」と思い続けることができる。

言い争いは続くだろう。

拮抗した問題なら、年によって許されたり、許されなかったりするだろう。

多数派が圧勝しているなら、自宅では許されるが、村として食べることは許されない。

「マヨネーズなんて許せん。各家庭でも作ることを禁じる」となったら発明の自由を奪う。

「醤油なんて古い！ マヨネーズだけでいい！」は伝統を破壊し、醤油を好きだと思ふ人の自由を奪う。

極端すぎる主張は、どっちも自由を奪う。

一人の人の中の変化として見た場合、最初は珍しいし、めったに食べる機会がないから、マヨネーズが食べてみたいので賛成する。

しかし、だんだんあっさりした醤油味が懐かしくなり、マヨネーズを欲しくなくなる。

それでも、自分が欲した経験があるから、「マヨネーズを欲する気持ち」を認めて、マヨネーズ賛成派に投票し続ける。

そんな流れが多くケースなのではないだろうか。

-----  
では、共同風呂が男湯と女湯にわかれていたのが、どちらでもない、と主張する人が現れたらどうするのか。

それは異常だと否定する保守派。

そういう感覚もあるかもしれないと認める改革派。

どちらかに決めるべきと曖昧さを認めないのが保守派なら、新しい浴場を用意してはどうだろうかと拡張を求めるのが穏健派で、そもそも男女の区別をなくそうと主張するのが改革派だとしてよう。

「そもそも男女の区別をなくそう」は、男と女がいる事実を無視している。

またどちらかになれと言われても、どちらでもないと感じていることを変えようがない。

風呂の増設は、一人のためにみんな専用風呂を用意するとなったら、賛否はわかるだろう。

自分で自分のための浴場を用意することまで止めることは自由を奪うが、水の使用に制限があ

る場合、干渉することになる。

結局、それまで利用していたどちらかの風呂に、みんなが入ってから、一人で後から入る、「時間制」を設けることが、小さな村では精一杯の対応ではないだろうか。

-----

共同部分がある場合、不快な思いをさせないように、お互いに気をつけあって、自制して暮らす。

これくらいはいいだろうと甘い人もいれば、過剰に遠慮する人もいる。

「ダメなこと」は、時代によっても、集まった人によっても変わる。

同じことをダメだと思い、実際にしない人の集まりにいれば、快適に過ごせる。

嫌だと思うことを平気でする人がいれば、不快に感じる。

「それは潔癖症すぎるのではないか」ということでも、その人と付き合う上では合せなければならぬ。

嫌なことでも、全てにいちいち苦情を言っていたら、言われた側は気が滅入ってしまう。

何を言って、何を言わないかは、難しい。

できれば、何も言わなくても快適に過ごせる関係の中にいたいと思う。

その思いがどんどん強くなれば、分裂という結果になる。

-----

醤油とマヨネーズの話に戻ると、いろいろなものを発明して、楽しみを与えることは大切だと思う。

しかし、どんどん増やし続けて、全部用意するとなったら、予算も手間も大きな負担になる。手軽さがない。

無限に増やすことはできないので、2つか、3つくらいに絞ることが求められる。

「やる」を認めるなら、「やめる」が大切になる。

男と女に当てはまらないケースの場合も、心と体が違う人がいることは理解を示せても、自分自身のことではないから、他人のこととしてとらえる。

醤油とマヨネーズ問題は、自分も食べるから、当事者として考え、行動する。

しかし、LGBTは当事者ではない。

LGBTは、ガンなどの病気と違って、今は違うが将来なるかもしれないこと、ではない。

はっきり、女の体と心を持ち、異性を恋愛対象にする、と言える。それは覆らないだろうと思う。

すると、自分が望むことと、相手が認めさせたいことは、違ってくる。

マヨネーズを食べたいと思った自分ではなく、醤油だけでいいと思った保守派の立場と近い状態になる。

自分の問題として認めることを求める立場ではなく、他人の問題を受け入れる立場に立つ。

醤油とマヨネーズなら、好きなものを繰り返すより、新しいものをためてみたいと思うから、改革派と言える。

うちは親が新しいもの好きだったが、子どものころは貧乏だったので、醤油で我慢してと言われたかもしれない。

そうしたら、村のお祭りがマヨネーズを食べられる唯一のチャンスとなる。

そこでだめなら、自立したときがチャンスとなる。

昔なら、結婚するということだから、嫁ぎ先の家次第。

現代なら、自分の実力次第で自由に買うことができるが、自立していないので、結局、世話してくれる親の意見次第。

LGBTに関しては、男か女かはっきりしろ、とは言わないが、男女の別を失くして誰でもOKにしましょう、には女だと感じている自分の感覚を無視されて嫌だ。

追加するために負担金を払えと言われても、自立しているわけではないからそれはできない。

結局、時間制で利用、に意見は落ち着く。

民主的な世界なら、「今、わたしが思っていること」を一票に託して意思表示できる。

影響力のある人の意見で決まるなら、わたしの思いを表明する機会はない。

支配者を賛美することはできても、批判することは難しい。

聞かれれば、恐れながら、と本心を語るかもしれないが、聞かれもしないのに言うことは慎むだろう。

どちらにしろ、自分の思いがダイレクトに実現されるわけではない。

その分、責任は軽い。

悪いところがあっても、自分がこの責任を引き起こしたのだ、と悩まなくて済む。

お金があって、労働力もあって、要求にどんどん答えられる環境がある豊かな世界ならいいが、お金がなくて、手間もかけられなくて、要求をはねつけて弱い立場の人を見捨てることで、全体を守ることが問われたなら、それはとても辛いことだ。

のぼり調子の時のリーダーはいいが、くだっていく時のリーダーは辛い。

-----

自分が、保守側の立場、「わたしはそうは思わない」に立った時、人はどこまで妥協できるだろう？

男に生まれ、醤油を好み、女を愛する人にとって、マヨネーズを認め、女が女と付き合う世界を認めることは、どこまで許せるだろうか？

許すことができない場合は、原理主義が生まれるのではないだろうか。

醤油だけでいいと思っているのに、マヨネーズを認めたことは、もっと評価されてもいいのではないか。

男と女の区別だけで困らない人が、LGBTを認めることも、もっと評価されてもいいのではないか。

我慢して当然、と権利として主張しはじめたら、認められても満足しないし、認めた側も不満が残る。

互いにいがみ合うだけだ。

自分が自分であることを認める自由を認めるなら、多数派だろうが、少数派だろうが、自分の感じたことを大切にしたい。

「許せない」と思う時、どうしたらいいのか？

-----

自分の力でどうにかできないわたしは、人がしてくれたことを受け入れることになる。どうしても困ること、体力的に受け付けないことなどは言うが、どちらでもいいことは相手のやり方を尊重する。あれこれ言わない。

もし、そこで口を出したり、手を出したり、干渉すれば、確実に衝突するだろう。

それは好きじゃない、と思うことでも、合せられることなら合わせてしまう。

すべて自分の思い通りにしたい、というタイプではない。

だから、もし、保護区と管理区と自由区があったなら、自立できないと思えば、保護区を選んで、決まりを受け入れることをしたと思う。

ただ、薬なしには眠れないし、毎日きちんと決まった時間に起きて活動することは難しい状況にある。

でも、入院していた時は、きちんと決められた時間に三食とっていた。就寝時間に寝ていた。だから、できないわけではないかもしれない。

しかし、早く退院したいと思ったから、本当に耐えられるかどうか分からない。

買い物とかも時間が決まっていて、みんなで集まって、短い時間に急いで買わないといけなくて、すごく嫌だった。

父が見舞いに来て、洗濯物を渡して、着替えをもらったあと、近くのスーパーにパックジュースやお菓子を買いつれていってくれたから、まだましだったけども。

親はいなくて、わたしはひとりぼっちで、誰も訪ねてくることなく、ずっとこのままここで生きなければならない、という幻想に支配されていた時は、病院の人の言うことに逆らわず、めっちゃはいはい聞いていた。

委縮していた。

もともと「こうして！」と強く言うタイプではないが、決められたことにものすごく従順になっていた。

あきらめに支配されていた。

自由区で行き詰って、もう死ぬしかないという状況まで追い込まれて、年齢制限に引っかかって保護区に戻るという選択肢もなくなっているなら、どうするだろう？

死の街で自殺を選ぶ人は、限られてる気がする。

車で、歩行者に突っ込んで、人を巻き込んで殺す方向に向かいそう。

そうになったら犯罪者として裁かれることになる。

社会的な救済を用意することは、犯罪を防ぐという意味で必要なんだろうか？



しかし、社交性や協調性を持たない人を支援し続けることは可能なんだろうか？

「共同体の一員として、一緒に給食を食べ、仕事をして、別々の家に住み、別々の風呂に入る」という集団として協力もするが、自分だけの世界もある状態で、救われる人はいないのだろうか。

力が有り余っているなら、山男として自然の中で生きる自由がある。  
体を鍛え、自然と一体となって、原生林を移動する暮らしは、わたしには魅力的にうつる。

山男は、米と味噌だけもって、原生林を歩き、弓矢で獲物を狩り、肉を自由に食べる権利がある。

自然を保護しつつ、山菜や野草を食べることもできる。

皮を売ること、村の運営に貢献することもできるし、自分たちの装備として使うこともできる。

害獣から人の領域を守る、聖なる役割も担っている。

そういう人にわたしはなりたかった。

実際は、肉をさばくところを見たら、食べられなくなりそうな弱虫だけでも。

そもそも歩く体力はないし。

林業も、農業も、給食係も、村の運営も、立派な仕事だ。

不自由かもしれないが、安定感がある。

マヨネーズを発明した男になるしか生きられない資本主義社会は、本当に自由なんだろうか？

保護区のような、保守的な生き方が選択できるからこそ、自由区の革新を求める生き方が意味を持つのではないだろうか。

「保護区ならできないことが、自由区ではできる！」という認識なしに、自由を実感することは難しいと思う。

保守がなくなり、発明して、改革派として生きるしかない世界は、変化が激しく、無駄が多く、安定性に欠ける。

役立つか分からないことをする人が大半の社会は不安定。

しかし、役立つことだけしていたら、衰退する。

「マヨネーズを発明した男のような、発明する人になりたい人」は、自由区を選んで、挑戦す

る自由を認める。

成功したなら、自分の資産で死ぬまで楽しく生きてほしい。

失敗したなら、40歳までに保護区に戻って、共同体の中で生きてほしい。

全体として支えるべきなのは、挑戦できる仕組みであって、消費者として無限の自由を要求する仕組みではない。

「新しいものを与える自由」を認めることはできても、「新しいものを要求する自由」は発明して提供する人がいなければ成り立たない。

保護区の人々には、お小遣いが与えられるから、それを使って、「新しいものを買う人」になってくれる。

もともとは、自由区の成功者が運営権を勝ち取るために払った寄付だから、富の再配分であり、出した人に返ってくるだけかもしれないが、もしかしたら、新しいサービスを生み出してお金の流れを変えるかもしれない。

可能・不可能を考えないで、無制限に要求する態度は、子どもじみている。

誰かを奴隷にしないと成り立たない自由は、支配関係と言える。

「わたしが思う通りに支援しろ」は、弱さを武器にした逆支配であり、正しい姿ではない。

では、「受け入れる」をしない人をどうしたらいいのか？

お金がなければ、自由は制限される。

嫌われることばかりすれば、孤立する。

お金もなく、嫌がることばかりする人に対して、どう接するのか？

殺すをしたら行き過ぎなら、「見えないくらい離れて暮らす」が妥協案だと思う。

関わらない。

門を閉められて、背を向けられて、入れない領域が増えたなら、行きつく先は、無法地帯。

そこは、力がものを言う世界。

弱者が守られない、弱肉強食の世界。

自分の思ったままにふるまい続けたら、何かしらの方法で勝つことが問われるのだと思う。

譲り合う世界とは全然違う。

例えるなら、海賊だろうか。

パイレーツ・オブ・カリビ안의無法の街みたいな感じ。

-----

保護区がセーフティネットになるのは、「相手がしてくれることを受け入れる」をする人だけ。  
なんでも思い通りにしたいとなったら無理。

もし、何もかも思い通りにしたい人が、弱肉強食を前提に支配したなら、逃げ出すことしかできない。  
難民になる。

弱肉強食を悪だと考える国に住んでいる。  
時代が下れば、そうではなかった。

悪に支配されないように、無法地帯ができることは認めても、勢力をそぎ、支配下に置くことを怠らない努力が求められる。

無法地帯を認めず、「自分のことではなくても、他人のために受け入れることを強要する世界」だけになったら、争ってでも自分らしく生きたい人は行き場を失う。

物理的に抑圧されない限り、拡張し続ける自我を持っている場合、力をぶつけ合う場所が必要なんだと思う。

根本的な違いを受け入れて、見て見ぬふりをして、互いに距離を保たないと、結果的に、無謀なことができる悪が力を持ち、弱肉強食の世界に逆戻りするなら、自分らしさを求め続けるのも生きづらいと思う。

-----

「2173再構築」という世界の世論をまとめるなら、以下のような感じだろうか。

自分らしく生きたいなら、世の中の役に立って、金をもうけて、自由を買いなさい。  
そこまでの実力がなく、妥協して生きることは悪いことじゃない。求めすぎず、やってくれることを受け入れて、相手の成長を見守ることも必要だ。

自分を貫くことは戦いだから、強い者しか残れない。

でも、本当に強い人は、上手に他人の力を利用して、適材適所で支え合うことができる。

「まかせる」をする。

そして、「まかされること」を持つとする。

まかすことも、まかされることもせず、暴力で支配することは悪だ。

自らが好んで無法地帯に身を置き、弱肉強食を選ぶのは自由だが、望んでない人を巻き込むことは許されない。

16歳で独立した後、どこで何をして生きるかは、本人の自由となる。

13歳で入寮させないことは罪に問われる。

12歳まで養育しないことも罪に問われる。

思いを打ち明ける自由があるなら、それを拒む自由も認める。

好きになって一緒に楽しむことを求めるのは行き過ぎだと思う。関わらないことを選んだなら、それは存在を認めたとと言えるのではないだろうか。

ハードルを上げ過ぎない。

なぜなら、世界は狭くなって、みんなつながってしまったのだから。

-----

話し合いだけでなく、実際に何かをしたならば、必ず優劣がつく。

山男なら身体能力とか、弓矢の扱いとか、キャンプの設営や肉の裁き方のうまさなどが問われる。

優れたものが信頼を集め指導的な立場に立ち、フォローを必要とするものが従う立場に就く。

自由区での経済競争も、同じことが言える。

実力が立場を決める。

当事者になったら、自然と立場は決まってくる。

参加せず、外側から批判をするだけならなんとでも言えるが、実践すれば必ず優劣がつく。

自分がどの程度の位置にいるか理解して、それに合わせた振る舞いが身につくのが、大人になる、ということなら、実践せず、他人のことをとやかく言い続けている限り、子どものままでいられる。

子どものままで言いたい放題を許すことはできないから、13歳で寮生活をさせる仕組みを考えた。

自分を知る機会を設けた。

それを拒み、逃げ出したなら、保護区という救済がなくなるだけ。

成長を強要はしない。

しかし、個人的に支援してくれる人がいなければ、何もしない暮らしは成り立たない。必ず行き詰ってしまう。

海賊的な無法地帯が許されるなら、大人になってもタロットカードの愚者のような存在が社会にいてもいいと思う。

でもそれは、都会である自由区に限られる。

保護区では、子どもが愚者として振る舞う。

わざわざ成長しない大人を用意する必要はない。

なぜなら、歳月とともに子どもが入れ替わって、常に新鮮な個性を与えられて、刺激的であり続けるから。

-----

保護区所属でも、美容師などは、一か所に固定せずに、荷物を持って泊まり歩く暮らしをする。

一年に一人入れかえなければならないから、渡り、を選び続けることもできる。

保護区の生き方も、固定化されてはいない。

-----

全部一色にせず、色分けして、自分の色に合った場所を選べる自由がある、というのが特色。